

中世グローバルヒストリーの潮流

小澤 実

はじめに

歴史学の一領野もしくは方法論としてのグローバルヒストリーについては、すでに日本語においても十分な量の研究を私たちは手にすることができる。一般的な意味でのグローバルヒストリーの目指すところとこれまでに歴史について、水島司『グローバル・ヒストリー入門』、クロスリー『グローバル・ヒストリーとは何か』、羽田正『グローバル化と世界史』などを手に取れば、それぞれの著者独自の構想とともに、おおよそ把握可能である。グローバルヒストリーの日本への導入に際してその萌芽的核にあったのは、一般的には、英語圏で盛んになっている（経済的側面

に着目した）グローバルヒストリーの淵源と同様に、川北稔や秋田茂らが推進した世界システム論とイギリス帝国史研究である。そこで培われた関連する地域間での越境的関係性を軸として現在のグローバルヒストリー研究の隆盛に至ったという理解を、さしあたり示しておきたい。

しかしこの時点で理解されるように、グローバルヒストリーは、基本的に初期近代以降に生じた（ヨーロッパ側から見た）「世界の一体化」を起点として、もしくはそのような理解へのアジア側からの異議申立てとして、その叙述と分析の構築が図られてきたことも容易に指摘しうる。その結果として、グローバルヒストリーに関心を向ける研究者のほとんどは近世以降の専門家であるし、専門書や論集

などを紐解いてもそのほぼ全てが近世以降の事象を対象としている。^④西洋側の論理で構築されたグローバルヒストリーの構図に対してアジアの側から見た研究も現れて久しいが、それもやはり同じ時代枠の土俵の中での議論であったことは否めない。^⑤グローバルヒストリーが内包するそれ自体の来歴とトピック選好が、意識的にせよ無意識的にせよ、グローバルヒストリーという分野を規定している、と言っても良いかもしれない。それでは初期近代以前の世界でグローバルヒストリーを論じることは困難であるのか。

本稿では、とりわけ五〇〇年から一五〇〇年にかけてのヨーロッパ半島をグローバルヒストリーに関連づける研究に焦点を当てることで、中世グローバルヒストリーの来し方と今後の展開について何らかの示唆を得ることに努めた。その際、仮に中世グローバルヒストリーなる分野が成立するとして、その分野は言語とヒストリオグラフィイを異にする世界の各国で、それぞれ固有の理路で生成しているという筆者の考えにしたがい、英語圏、ドイツ語圏、フランス、日本という四つの地域を取り上げて検討する。

一 英語圏

『ヨーロッパ覇権以前』

最初に、さしあたりの出発点を定めておく意味でも、ジャネット・アブールゴドの研究を定位しておきたい。中世のグローバル化研究を位置付ける場合、おおよそ、研究者の出身国を問わず、本書『ヨーロッパ覇権以前』が中心的な課題となることが多い。^⑥中世最末期を起点とする世界システム論を描き出したウォーラステインの議論をさらに二〇〇年遡らせ、なおかつ欧米人研究者が無意識に前提としていたヨーロッパ半島の優位性を単なるサブシステムの一つとして相対化したというところで、エポックメイキングな作品であることには違いない。ウイリアム・デイの主張にしたがって、本書の主張点を整理しておこう。^⑦

- (a) 本書によれば、様々な局面とりわけ航海と国家（制度）の進展が、一三世紀のヨーロッパ、中東、アジアを結びつける国際交易ネットワークの確立の助けとなった。(b) 西欧が勃興し、一六世紀に世界システムを確立したのは、西欧が力を持ったからではなく、東方が失敗した、つまり「モングルの平和」が崩壊するのと歩みをとみにした、一四世紀の黒死病のカタストロフィックな影響のためであった。(c) 必ずしも彼女が新しい言葉を与えているわけではない。

が、彼女のおかげで、「都市群島」(archipelago of towns)や「世界都市」(world cities)という、そのほかの研究者が提起した概念が受容される助けとなった。

デイは以上を受けて、さらに本書の議論を次のように評価する。(d)本書によれば、中世世界システムは、すでに存在していた中東とアジアの交易ネットワークにヨーロッパが参画することで成立した。システム内の経済は資本主義ではなく前資本主義であり、その世界システムは絶えず成長していた。(e)彼女によれば、ヨーロッパは、三つの主要な地域のなかで最も遅れていた。しかし一四世紀の黒死病と、モンゴル帝国の崩壊後に東方に起こった不安定ののち、ヨーロッパは当該システムの主張部分として立ち現れた。(f)本書では展開されずそれゆえに影響もさほどないが、中世世界システムの起源と中世から近代への移行に関する彼女の考えは、将来の研究にこの上ない視野を提供した。

もちろんこのようなアブールゴドの主張は、歴史家や社会科学者いずれからも多くの批判が寄せられた。曰く、本書は二次文献しか用いておらず歴史的事実に対する誤認も多い、曰く、同じ条件で別の説明も可能である、曰く西欧の影響を大きく見積もりすぎである云々。しかし、いずれにせよ、ヨーロッパ半島どこか国民国家単位の歴史に集中しすぎてきたきらいがあるヨーロッパ諸国を対象とす

る歴史家にとって、アメリカ人で都市社会学者である、言ってみれば「よそ者」のアブールゴドの見取り図は、西欧をユーラシア史の中に置き直し、グローバルな見方が可能であることを提示したことは間違いない。デイの分析を待つまでもなく、本書が中世ヨーロッパ史に与えた影響を小さく見積もることはできない。

アメリカ

欧米圏において最も世界史／グローバルヒストリーを追求しているのはアメリカである。それはスパー・パー・パワーとしてのアメリカや世界通貨としてのドルの歴史そのものがグローバルであると同時に、文明興亡史・世界史・グローバルヒストリー・ビッグヒストリーといった「大きな歴史」を求めるアメリカ特有のコンテクストもあるのだろう。しかし二次文献の切り貼りではない歴史学の水準を保持するという条件をつければ、やはりここでもウォーラー・ステインの世界システム論で対象とした一六世紀以降が対象であり、十分に中世に接続はしていない。先駆的な事例として、各国間比較にきちんと向き合おうとした朝河貫一らの比較封建制論などを認めることは可能であろうが、歴史学プロバパーの中で、グローバル性を前面に出した中世史研究は、研究大学を自認していたハーヴァードやプリンストン

ですら、近年に至るまで現れなかった。ピルグリムフアール・マコーミックとするWASPの「正史」からすれば、ヨーロッパ中世がそもそもアメリカ大陸の歴史にとつて「他者」であるという事情も手伝っているのかもしれない（言うまでもなくこの「正史」は、メソアメリカも検討対象とする後述する「グローバルな中世」のアプローチやミシシッピ文明などの先住民の歴史を考慮した場合、たやすく崩れ去る）。

とはいえ、グローバル性を内包する中世研究がアメリカで皆無であったわけではない。それどころか、特殊アメリカ的に展開した研究分野において、むしろ接続と比較を意識した研究は陸続と生産されてきたようにも見える。ジョージ・サートンやチャールズ・ホーム・ハスキンス以来の科学技術史、ロベルト・ロペツやケネス・セツトンの地中海交渉研究¹¹⁾、マーシャル・ホジソンらの中世イスラーム研究¹²⁾、ゲニザ文書を用いたユダヤネットワーク研究¹³⁾、デニス・サイナーを嚆矢とするユーラシア交渉史¹⁴⁾、一見無関係な国家間比較を試みるヴィクター・リーバーマン『奇妙な平行』などの比較史¹⁵⁾は、ある種アメリカの社会的知的風土とあいまって蓄積されてきた。

このような研究風土を前提とした上で、中世史家として中世グローバルヒストリーの一角を担っているのはマイケ

ル・マコーミックである。彼の『ヨーロッパ経済の諸起源』は、いわゆるピレンヌテーゼの全面的刷新である¹⁶⁾。ローマ帝国末期からカロリング期に至るまでの初期中世地中海とヨーロッパにおける交易ネットワークの再編と構造化を、膨大な文献資料、貨幣データ、考古資料などによって跡付けた。ピレンヌが主張していたような七世紀における断絶を見ることは不可能であり、カロリング期の経済成長も、ユーラシア西部にまで広がる、奴隷や奢侈品を含めた交易ネットワークの活性化を前提にしなければならぬという見解である。初期中世における交易ネットワークの連続性は、例えばリチャード・ホッジズやクラウス・ランスポーのような中世考古学者の研究によっても主張されてきた¹⁷⁾が、マコーミックは、資料根拠をあげた上で、ビザンツ帝国やイスラーム世界も包摂したユーラシア西部というコミュニケーション空間を設定し、グローバルな構造を提示した点で今後の議論の出発点となる¹⁸⁾。

本書の刊行後、マコーミックは、自然科学との協働により、新しい領野を開くことになった。つまり、これもまたアメリカにおける歴史学の一つの特徴である環境と人間との関係史、つまり疫病、災害、気候変動などから見た初期中世世界の研究へと移行した。これらは歴史家のみで可能となる研究ではなく、自然科学者による素材の分析が必須

となる。マコーミックは今のべた様々な研究において、自然科学者とチームを組み成果を上げている。同様の流れは、マコーミックのみならず、プリンストン高等研究所のパトリック・ギアリにも見られる。初期中世のエスニステイの問題を文献資料でアプローチしていたギアリは、人骨のDNA調査を通じて、民族移動期の「民族的」特性を明らかにしようとしている²⁰。その一方で、マコーミックの教え子でもあったカイル・ハーパーは、古代における奴隸制についての単著を出したのち、ローマ帝国の解体と環境変化を結びつける論争の書『ローマの運命』を刊行した²¹。環境決定論のようにも見える本書の解釈については、すでに歴史気候研究の専門家から長大な批判が出ている²²。いずれにせよ、環境史に対する長い歴史を持つアメリカにおいては、自然科学との協働により、歴史世界の見直しが進展している。とりわけプリンストン大学の「気候変動と気候史研究イニシアティブ」(Climate Change and History Research Initiative)というプログラムは、ビザンツ史家のジョン・ホードンが代表をつとめ、中世を中心に気候の研究を進めている²³。マコーミックとハーパーのハーヴァードとは若干の距離を感じるが、いずれにせよ、アメリカの資金力が支えている研究であるように思われる。

「グローバルな中世」

現在イギリスで中世グローバルヒストリーを推進しているのは、前号で解説し、筆者も応分に関わっているオックスフォード大学を中心とした共同研究である。この共同研究の特徴を一つ上げておくなら、マイクロストーリーから見たグローバルな構造を主眼に置いていることである。キャサリン・ホームズも記しているように、グローバルヒストリーは、必ずしも、広大な空間や長大な時間を全て可視化する必要も記述する必要もない。彼女が指摘しているように、例えばイーストアングリアという「地方史」の中にも中世後期の貴族層のネットワークの中にも、グローバルな構造を再構築できる要素はある²⁴。前号で記しているので詳細はここで記さないが、『グローバルな中世』(The Global Middle Ages)と題された最初の論集ではネットワークを重視していたオックスフォード・グループは、現在筆者らとともに進めている「中世のゾミア」計画では、スコットのゾミア論を参照軸としながら、ヴィクター・リーパーマンが試みたように、中世という共通する時代における「国家なき空間」を各地域で試掘し、その共通点から「グローバルな中世」を再構成しようとしている²⁵。

もちろんイギリスも、オックスフォード・グループだけではなく、独自に中世グローバルヒストリーを志向する研

究者は各地にいる。イギリスがとりわけ進展している中世史分野として、仮にヴァイキング研究、ビザンツ研究、十字軍研究を挙げておこう。これらはいずれもイギリスにとって、自国史の一部でもあり、なおかつ外国史でもある領域である。ヴァイキング研究の特徴としては、「ヴァイキング・ダイアスポラ」という、拡大定住するヴァイキングによる接触状況を重視するジュダス・ジェツシュやレスリー・エイブラムズといった研究者群と、自然科学のデータを利用しながらとりわけ北大西洋世界におけるヴァイキングの生活した生態環境を復元するジェームズ・パレットらの研究とが目立つ。ビザンツ研究においては、デイミトリ・オボレンスキー以来のオックスフォード大学の研究者、つまりジェイムズ・ハワード・ジョンストン、ジョン・サン・シェパード、マーク・ウイトウ、キャサリン・ホームズ、ピーター・フランコパン、マレク・ヤンコヴィアクらが、偶然か必然か、ビザンツ帝国と外部世界との接触について重要な研究を残している。十字軍研究は、ステイヴン・ランシマンという特異な存在の業績を継承しつつ、ランシマンの叙述をより「科学的」に書き直したジョン・サン・ライリー・スミス、バルト海十字軍の研究者エリック・クリスチャンセン、後期十字軍の専門家ノーマン・ハウスリ、イスラーム側の視点を導入したキャロル・ヒレンブラ

ンド、十字軍と関係に重点を置くビザンツ史家ジョン・サン・ハリスをはじめとする多数の研究者によって書き直されてきた。こうした十字軍研究の背後には、イスラーム、移民、中東に対する関心という現代的側面に加えて、ライリー・スミスが設立者の一人となり、一九八〇年に創設された国際学術組織「十字軍とラテン・東方研究協会」(Society for the Study of the Crusades and the Latin East)と定期刊行論集『十字軍』(Crusades) による研究者の組織化も想定することができるだろう。こうした組織を背景にして、十字軍研究の総括、『新オックスフォード版十字軍』、そして『ケンブリッジ版十字軍史』も予定されている。十字軍と隣り合わせであるイスラーム研究もまたイギリスでは盛んであるが、中世グローバルヒストリーの成果として顕著な事例を挙げるとすれば、ピーター・ジャクソンの『モンゴルと西欧』である。ジャクソンはもともとデリー・スルタン朝の専門家であるが当該テーマにおいて現在最も信頼できる手引きとして、本書は重要な役割を担うことになるだろう。

一般書店の書架に並んでいるクリス・ウィツカム『中世ヨーロッパ』、ピーター・フランコパン『シルクロード』、デヴィッド・アブラフィア『偉大なる海』といった中世史家によるベストセラーも、例えば、リチャード・サザーン

やロバート・バートレットによる定番であった中世通史と比べてみれば、^③いかにグローバルな中世世界を意識した構成であるかというのによく理解できる。著者たちのEUに對する向き合い方は様々ではあるものの、中世においてすらグローバル化に注目した著作が陸続と刊行されたのは、イギリスの置かれた位置と読者の関心をグローバル志向と読み取った編集者による賜物であるように思われる。イギリスがEUから離脱したいま、このような著者・出版社・読者層の関心がどのように変化するのは、また別の問題ではある。

『ケンブリッジ版世界史』

グローバルヒストリー研究そのものにとって近年で最も大きな成果の一つは、『ケンブリッジ版世界史』(Cambridge World History) 全七巻(九分冊)の刊行であろう。アメリカで刊行されている『世界史雑誌』(Journal of World History)の関係者が中心となって編まれた論集である。それぞれのタイトルを示しておこう。

一卷 世界史を導入する(紀元前一〇〇〇〇年まで) (デヴィッド・クリスチャン編)

二巻 農業とともにある世界(紀元前一二〇〇〇年から前

史苑(第八〇巻第二号)

五〇〇年)(グラム・バーカ、カンデイス・ガウチャ編)
三巻 比較視野の初期都市(紀元前四〇〇〇年から西暦一二〇〇年)(フーマン・ヨッフィー編)

四巻 国家、帝国、ネットワークとともにある世界(紀元前一二〇〇年から西暦九〇〇年)(クレイグ・ベンジャミン編)

五巻 拡大する交換と紛争のネットワーク(西暦五〇〇年から一五〇〇年)(ベンジャミン・ケダー、メリー・E・ヴィスナーIIハンクス編)

六巻 グローバルな世界の建設、一四〇〇—一八〇〇年..
第一部 定礎(ジェリー・ベントリー、サンジャイ・スブラマニヤム、メリー・E・ヴィスナーIIハンクス編)

六巻 グローバルな世界の建設、一四〇〇—一八〇〇年..
第一部 変化のパターン(ジェリー・ベントリー、サンジャイ・スブラマニヤム、メリー・E・ヴィスナーIIハンクス編)

七巻 生産、破壊、接続、一七五〇—現在:第一部 構造、空間。境界決定(ジョン・マクニール、ケネス・ポメラント)

七巻 生産、破壊、接続、一七五〇—現在:第二部 共有された変化(ジョン・マクニール、ケネス・ポメラント)

中世は主として第五巻で扱われている。しかし三・四巻では初期中世に触れる部分があるし、六巻では中世後期に分類可能な時期を扱っている。全体として前近代史に重きが置かれているのは、総編集者でウィスコンシン大学に勤務するヴィスナー・ハンクスが初期近代ジェンダー史の専門家であるため、近代に軸足を置くグローバルヒストリーよりも通時的かつ多極的な「世界史」(world history)の理解に従ったこともあるのかもしれない。彼女はシリーズでは第五巻と第六巻という中近世を対象とする巻の編集も担当している。彼女がアメリカ人ということもあってか、寄稿者は特定の国に固まらないように配慮されている。なお彼女自身は本叢書の刊行とあい前後して、個人によるハインディな世界史も刊行している。⁽²⁴⁾

本叢書のベースにあるのは、アメリカの世界史協会(World History Association)である。一九八二年に「歴史意識、人々の間での理解、そしてグローバルであることの自覚を増進させるであろう諸活動を推進するために」(promote activities which will increase historical awareness, understanding among and between peoples, and global consciousness)立ち上げられたこの協会は、研究者のみならず中等教育の教員もメンバーとして入っており、一九九〇年には『世界史雑誌』(Journal of World

History)を立ち上げた。現在この学会は、世界中のグローバルヒストリー・世界史の学術団体の連携組織である「グローバルヒストリー・世界史組織ネットワーク」(NOGWHISTO: Network of Global and World History Organizations)の一つとして、さらにはそのネットワークが歴史ある国際的な歴史家組織「歴史諸学国際委員会」(Comité international des sciences historiques)の一部として機能している。⁽²⁵⁾ そうであることを考えるならば、本叢書は、単純にアメリカの歴史家団体やケンブリッジ大学出版会のローカルな思惑を超えたところで成立した企画であるようにも思われる。⁽²⁶⁾

二 ドイツ語圏

ドイツ語圏（東西）ドイツ・オーストリア・スイス）は、言語も空間も必ずしもグローバルな状況にあるとは言いがたい。それどころかナショナルヒストリーの壁が最も高い圏域の一つでもあった。しかしEUの中で中心的役割を果たしていたこともあいまってか、ここ二〇年ほどの間にヨーロッパ全体、さらにはグローバルな視角でアプローチする研究が激増した。ユルゲン・オスターハメル、ヨアヒム・ラートカウ、ゼバステイアン・コンラッドらの著作や近年の世

界史叢書は、ドイツ学会でもグローバルヒストリーが一定程度以上の地位を得つつあることを示している³⁷⁾。それを後押ししたのは、各国の学術政策が準備していた大型資金である。ドイツやオーストリアの学術資金は、資金付与期間が長期かつその額が莫大であること、資金が付与された大学を叢書の刊行と並行させ集中的に特定の研究拠点とすること、なおかつポストドクターと博士学生を雇用して当該分野の再生産を図ることを特徴としている。これは中世研究に対して与えられる資金についても例外ではない。以下ではドイツとオーストリアの事例を見てみたい。

ミヒヤエル・ボルゴルテとフンボルト大学

スタツフ数と伝統を考えると、ランケ以来の伝統のあるベルリン大学（現在は自由大学とフンボルト大学の二つ）と「ドイツ中世史料研究所」(Monumenta Germaniae Historica)を抱える「ミュンヘン大学が、ドイツにおける中世史の研究拠点である³⁸⁾。そのうち、ベルリン自由大学とミュンヘン大学はそれぞれグローバルヒストリー研究所を有しているが、フンボルト大学は修士学位のみで特別な研究所はない。しかし中世グローバルヒストリーに特化した研究と教育を行っていたのは、序文で述べたように、フンボルト大学のミヒヤエル・ボルゴルテである。伝統的に一

史苑（第八〇巻第二号）

般史と国制史・法制史の親和性が高いドイツの中世研究においては、ボルゴルテ教授前後の主だった中世史家は異彩を放っていたかもしれない。つまり、従来型の国制史がなお支配的である中で、アルノルト・アンゲネント、ゲルト・アルトホーフ、ヨハネス・フリート、オットー・ゲアハルト・エクスレといった「社会史」もしくは新しい国制史志向する³⁹⁾、なおかつ生産性の高い研究者が陸続と現れたことである。中世教会における寄進活動に注目するボルゴルテもそのような流れの一部を構成しており、なおかつその動きを代表するかのように、ドイツ語圏における「社会史」研究の動きを整理する単著をものしている⁴⁰⁾。

フンボルト大学時代のボルゴルテの研究活動は、大学の紹介に従えば、次の三点にまとめられる⁴¹⁾。第一に一九九八年にフンボルト大学内に「ヨーロッパ比較中世史料研究所」(IVGEM: Institut für vergleichende Geschichte Europas im Mittelalter)を創設したことである。海外のゲスト（三佐川亮宏氏や藤崎衛氏も含まれる）を受け入れることで国際的な研究拠点となった当該研究所は、二〇〇五年から一一年までドイツ学術会議による「ヨーロッパ中世における統合と解体」(Integration und Desintegration im europäischen Mittelalter; 2005-12)を獲得し、なおかつ比較歴史学を標榜する「中世のヨ一

ロップ」(Europa im Mittelalter) という叢書を刊行した。⁴²⁾ 第二に、「トランスカルチャーな織物としての移動：四〇〇年から一〇〇〇年のイタリア」(Migrationen als transkulturelle Verflechtungen: Italien von ca.400 bis c.1000) という研究を出発点として、ビザンツ研究、イスラーム研究、ユダヤ研究と協力することで、グローバルな視野を中世に持ち込んだことである。その成果は、三つの一神教という観点から著された、ジードラー社から刊行されたボルゴルテ教授による中世通史に現れている。⁴³⁾ 第三に、いくつかの基金を得て進められていた、前近代寄進制度の比較史研究である。この研究ラインは、「寄進研究」(Stiftungsgeschichte) という叢書の刊行と並行しながら、最終的に、ヨーロッパ研究会議 (European Research Council) による「中世社会における寄進団体：諸文化の比較」(FOUNDMED: Foundations in Medieval Societies. Cross-Cultural Comparisons; 2012-17) という巨大資金を得た。⁴⁴⁾ ドイツ中世史業界において最も外に開かれた視野を持っていたように思われるボルゴルテ教授は、ベルリン・フンボルト大学を中世比較研究の拠点とした。⁴⁵⁾ フンボルト大学の教授職は引退したものの、現在ボルゴルテ教授は同大学内に設置された「イスラーム神学研究所」(Institut für Islamische Theologie) の研究員として、

引き続き精力的に研究を進めている。彼の元で博士号を取得した中世グローバルヒストリーの視野を持つ若手研究者は、現在ドイツのあちこちの大学に職を得ている。

他方で、同じベルリンにあるベルリン自由大学のトマス・エルトルも、中世におけるグローバルヒストリーの研究を進めている。博士論文はハインリヒ六世の文書行政で、教授資格論文はフランシスコ会士の認識論をテーマとしたエルトル教授は、その後、ウイーンの社会経済史といったローカルな問題に力を注ぐ一方で、中世後期のグローバリズムの概観なども刊行している。⁴⁶⁾ 加えて、近年話題となっているのは、民族移動期におけるアフロ・ユーラシアを包摂したグローバルヒストリーを現した古代史家ミーシャ・マイアーである。⁴⁷⁾ いわゆるゲルマン人の民族移動をより大きなユーラシアの民族移動の枠組みで論じるという、フランツ・アルトハイムの関心を引き継いだ議論であり、第一級の古代史家によるアップ・トゥ・デートされた概観は、今後の参照点となるだろう。もちろん、上述した研究者らのように、表面的にグローバル（ヒストリー）という用語を用いてなくとも、それに準ずる現象を扱う研究者は少なからずドイツにも認められる。イスラームとの交渉、ハンザ交易、モンゴル認識や交渉、地図論などはドイツにおいて研究蓄積のある分野である。⁴⁸⁾ アメリカと同様に、それぞれの専門

家が自分の研究をどのように自己認識しているかはおくとして、いずれも中世グローバルヒストリーにとって重要な貢献であることは間違いない。

ウィーン中世研究所

報告三で詳しく述べているので繰り返さないが、ウィーンもまた現在、中世グローバルヒストリーの中心の一つとなっている。ウィーンにおける中世研究は一八五四年にウィーン大学内に創設されたオーストリア歴史研究所 (Institut für Österreichische Geschichtsforschung) が大きな役割を果たしてきた。文学や印章学といった補助学間 (Hilfswissenschaften) との共同を大きな特徴とした研究所は、歴代所長のほとんどが中世史家であった。とりわけ二代所長テオドル・フォン・ジツケルは、古文書研究の開拓者として、当該研究所のその後の方向性を決定した^④。他方で研究所の設立に先立つ一八四七年には、皇帝フェルディナント一世の名前において、イギリスのロイヤル・ソサイエティーやフランスの諸学アカデミーに倣う帝國科学アカデミーが創設された。一九九八年にこのアカデミー内に、ヘルヴィヒ・ヴォルフラムを所長とする中世研究所 (Institut für Mittelalterforschung) が創設された。ウィーンの中世グローバルヒストリーの拠点はまさにここ

になる。

ドイツと同様にオーストリアもまた、長期にわたる大型資金を特定の研究に投下する。中世研究所において代表者としてその役割を担ったのは、民族移動期のエスニシティ研究で著名なヴァルター・ポールである。彼はヨーロッパ研究財団 (European Science Foundation) の援助を得た国際プロジェクト「ローマ世界の変容」(Transformation of the Roman World, 1993-98) の一翼を担い、ウィーンの研究者をヨーロッパ各地の初期中世史と接続する役割を担った^⑤。おそらくこの共同研究の経験はポールにとって、プロジェクトによる共同作業と共通言語としての英語の意味を考える上で大きな意味を持ち得た^⑥。

ポールはオーストリアの人文系助成金として最大の「ヴァイトゲンシュタイン賞プロジェクト」(Wittgenstein-Preis-Projekt)として「初期中世ヨーロッパにおけるエスニシティのアイデンティティ」(Ethische Identitäten im frühmittelalterlichen Europa; 2005-2011) を獲得し、膨大な共同研究成果と若手育成を図った。この助成金はドイツ語が共通言語であったが、その後、ポールが立て続けに採択された三つのプロジェクトは、英語圏の大学とも協定を結び、英語を共通語とする国際プロジェクトであった。つまり、ヨーロッパ学術基金による「ヨー

ロップ研究領域における人文学」(Humanities in the European Research Area) による「文化記憶と過去のリソース」(四〇〇―一〇〇〇) (Cultural memory and the resources of the past, 400-1000 AD, 2010-2013)」、ヨーロッパ学術会議先端基金 (ERC-Advanced Grant) による「ヨーロッパにおける社会的凝集性」(アイデンティティ、宗教、四〇〇―一二〇〇) (Social Cohesion, Identity and Religion in Europe, 400-1200, 2011-2016)」、そしてオーストリア研究助成金による「共同体のヴィジョン」(キリスト教、イスラーム教、仏教に見るエスニシティ、地域、帝国への比較アプローチ、四〇〇―一六〇〇) (Visions of Community. Comparative Approaches to Ethnicity, Region and Empire in Christianity, Islam and Buddhism, 400-1600 CE (VISCOM); 2011-2019) の代表者をポールは務めてきた。

オーストリアがこれまで経験したことのない規模の英語による共同研究は、英語によるオープンアクセス雑誌『中世諸世界』(Medieval Worlds) の刊行^{②③}、リーズ国際中世研究集会での積極的報告、英語圏からのポストドクの採用、アメリカから招聘したフィリップ・ビュックとクラウディア・ラップという二人のスターなどによる、ウィーンでの英語化を背景としていた。ラップもヴァイトゲンシュタイ

ン賞プロジェクトとして、「動くビザンツ帝国」(Moving Byzantium, 2015-2021) を統括している。このように、伝統的な歴史学や歴史補助学に対する価値観が支配的であると思われるウィーンは、今や「英語圏」でもあったのである。その結果として、もともと中世史学においては、オックスフォード、パリ、ミュンヘンなどと並ぶ研究拠点であったウィーンは、グローバルゼーションの進展で否応なく英語のプレゼンスが高まりつつある現在においてなお、中世研究ネットワークのハブとして機能している。

このような現状の中で中世グローバルヒストリーを牽引しているのが、若手のヨハネス・ブライザー^④カペラーである。彼の業績などについては別稿で述べているので繰り返さないが、英語も堪能で環境史をはじめとする英語圏の国際共同研究に数多く参加している彼は、時代は古代末期から近世に至るまで、地域は専門のビザンツ帝国にとどまらずユーラシア世界に至るまで、彼自身のフィールドとしている^⑤。初期中世に関してはすでに彼独自の「中世グローバルヒストリー」をものしているが、日本やアフリカも含め中世全体を取り込むだけの知識と実力を持っている。

なおオーストリアは、ドイツに先駆けて、グローバルヒストリーの叢書を刊行した^⑥。中心にいたのはアジア海域史のアンゲラ・ショッテンハンマーである。彼女はドイツの

ロデリヒ・ブタクと並びヨーロッパにおける中世海域アジア史の泰斗であり、数多くの論集も刊行している。⁵⁵⁾ヨーロッパ史の専門家とさほど共同研究を進めていないように見えるが、今後、重要なキーパーソンになるように思われる。

三 フランス

ブローデルの遺産

フランスにおけるグローバルヒストリーの基点の一つはしばしばブローデルに置かれる。⁵⁶⁾一六世紀の地中海を全体史というアプローチで再現した『フェリペ二世時代の地中海と地中海世界』が、従来の国境や言語の枠を超えた諸関係の集積としての歴史空間を叙述していたことは、今更指摘するまでもない。その結果としてウォーラステインの世界システム論やアブラフィアらによる海の歴史が誕生したことを思えば、グローバル史家がブローデルの研究を重視するのは当然とも言える。加えて筆者が指摘しておきたいのは、フランス語圏の研究における人文地理学と東洋学の伝統の厚みである。それらはいずれも現在の中世グローバルヒストリーにつながる要素を内包しているからである。

歴史学と分かちがたい人文地理学、とりわけ歴史地誌は、

史苑（第八〇巻第二号）

ヴィダル・ド・ラ・ブラシュやリュシアン・フェーブル以来フランス人文学の特徴である。ブローデルの洗礼を受けた戦後のフランス中世史に関する国家博士論文が必ず地域の枠組みと自然環境との関わりを設定し「全体史」を志向するようになる一方、⁵⁸⁾自然や環境と人間の関わりに関しても、フランスは一歩先を行くようになった。東方開発を歴史地理学的に跡付けたシャルル・イグネ、ノルマンディの塩業を出発点としたミシエル・モラ、中世後期の毛皮交易で博士論文を描いたロベール・ドロールらは、クロスビーやダイアモンドに代表される英語圏の植民地開発や環境破壊と結びつく環境史とは別のあり方の環境史を提供している。⁵⁹⁾

他方でフランスの植民地経験と関わる東洋学の伝統は、フランスにおける東洋「中世」に対する研究蓄積を促進してきた。一九世紀以来のフランス東洋学のなかでも中世ヨーロッパとの関わりでいうと、ポール・ペリオやジョルジュ・セデスの業績は現在なお基本文献として参照に値する。⁶⁰⁾

モリス・ロンパール

地理学と東洋学を自家薬籠中のものとし、ブローデルを驚嘆せしめたのは、イスラーム学者モリス・ロンパールの一連の研究である。アルジェリア生まれのロンパールはイ

スラーム中世史を専攻し、最終的には高等研究院第六セクションに籍を置いた。早世したロンバールは生前単著を残さなかったが、死後、彼の遺稿を元に、一冊の単著と四冊の論集が刊行された。フランス語圏以外にはさほど知られることのないロンバールの研究を中世グローバルヒストリーにとって重要な著作とみなす根拠は二つある。一つは彼の著作がユーラシア西部を移動する具体的なモノに注目し、そうしたものの通交を史料記述と考古学証言に基づき明らかにした社会経済史であったこと。ロンバールの研究では実際の取引量などが明らかにされ得ないという批判はありうるが、現在グローバルヒストリーで重視されているネットワーク構造とハブが先駆的に明らかにされている。もう一点はそうした構造を地図として視覚化したこと。従来の歴史研究においても地図は用いられてきたが、ロンバールは、巨大なユーラシア地図にモノの流れをプロットすることで視覚的に経済ネットワークを理解させることを重視した。現在、いわゆるデジタルヒストリーにおいて、様々なデータの視覚化が進められているが、ロンバールの研究はその先駆的な姿といえることができるだろう。東南アジアの専門家である息子のドニ・ロンバールやモリスを尊敬してやまないジャック・ル・ゴフをはじめ、モリス・ロンバールの遺産は、とりわけグローバルな要素を持つフラ

ンス歴史学のなかに確実に吸収されている。

インド洋、アフリカ大陸、フランス

近年、フランス発の中世グローバルヒストリーとして、三人の研究者に注目しておきたい。

一人目は、フィリップ・ボジャールである。ボジャールはもともとインド洋に浮かぶマダガスカル島の地域研究者であったが、突如として『インド洋世界』という浩瀚な研究書を刊行した。先史以来のインド洋の歴史を扱う本書のうち、第二巻が西暦七〇〇年から一五〇〇年という、西洋の時代区分でいうと中世にあたる時代を扱っている。ボジャールの特徴は、アブー・イルゴドが、モンゴル帝国というステップを軸とした一三世紀の世界システムを描き出したのに対し、東シナ海からインド洋そして地中海にかけての海域を交易空間とみなし、ユーラシアからアフリカにかけての世界システムを、さらに長いスペインで形成されてきたシステムであると想定していることである。アブー・イルゴドの『ヨーロッパ覇権以前』とは補充的な議論であり、海路や海域の重要性を改めて中世グローバルヒストリーの中で喚起したという点で重要な研究である。その骨子は英語論文として紹介され、なおかつ、主著が近年英訳された。その副題にはグローバルヒストリーと付されており、

本書が、中世グローバルヒストリーにおいて、今後、英語圏においても基本書となることを約束しているかのようである。

二人目は、近年コレージュ・ド・フランス教授に就任したフランソワ・グザヴィエ・フォヴェルの中世アフリカ研究である。中央アジア研究、東南アジア研究、インド研究、アフリカ研究などは、一九世紀以来の植民地化やグレートゲームに付随する植民地学問としての側面を強固に有しているが（研究者本人にそのような意識はなくとも考古遺物の保存箇所、現地の発掘権、調査書の言語、現地知識人の優先的学術言語などが支配の歴史を雄弁に物語る）、アフリカ研究も、とりわけフランスとイギリスの影響が強い。⁶⁴先ほどのボジャールのマダガスカル研究も、やはり植民地との関係が深い。アフリカ考古学と歴史学を専攻したフォヴェルは、中世アフリカの歴史を断章的に描いた『黄金のサイ』で注目を集めたのち、より専門的な研究を次々に刊行している。フォヴェル自身は必ずしもグローバルヒストリーという言葉を用いてないが、キリスト教化やイスラーム化、地中海やインド洋からくる商人集団、経済システムを動かす金など、いずれも中世グローバルヒストリーには不可欠な要素が論じられており、先ほどのボジャールと合わせて、英語圏やドイツ語圏よりも、サハラ以南も含めた

アフリカ大陸の置かれたシステム論的状况を提示しうる研究である。⁶⁵

三人目は、もともととはイタリア中世後期の都市における建築活動を専門としていたパトリック・ブシュロンである。フォヴェルと同じくコレージュ・ド・フランスの教授をとめ、中世後期からルネサンス期にかけての都市文化などについて膨大な著作を著しているが、近年、彼の編纂で注目を浴びているのが、フランス史をグローバルヒストリーの中に置き直した編著である。⁶⁶ドイツと並びナショナルな記述が目立ったフランス史を、グローバルな歴史状況に置き直すことでフランスが先史以来世界とつながっていることを示した本書は、ベストセラーとなり、英訳も直ちに刊行された。⁶⁷このようなブシュロンの試みの前史には、やはり彼が編者をつとめた一五世紀の世界史論がある。⁶⁸一五世紀というヨーロッパ半島にとって大きな転換期を、輪切りにした世界史の中に置き直し、それぞれの地域の歴史が互いにも連続した上で動いていることを提示した論集である。フランスにおいて蓄積のある中世後期のヨーロッパ人による「世界の拡大」研究を十分に利用した成果である。⁶⁹

四 日本

欧米圏で勢いを増しつつある中世グローバルヒストリーの研究者によって、言語障壁のあるアジア現地の研究は、アクセスしたくてもアクセスの困難な分野である。一部の研究の欧語訳、国際会議による研究交流、東洋学による仲介などで一部伝えられてはいるものの、必ずしも十分にアジア側の成果が欧米の中世グローバルヒストリーに反映しているとは言い難い^⑩。しかし明治以来伝統的に海外の動向に強い関心を示し、その結果として比較史や世界史を重視してきた日本は、それ自体で中世グローバルヒストリーに関する独自のヒストリオグラフィイを持ち得ている^⑪。

東西交渉史

漢学の伝統があり漢文史料を用いた東洋史研究が盛んであった日本においては、支那学の一環から出発した西域研究もまた重視されてきた。理由はいくつもあるだろうが、いわゆるシルクロードとその終着点としての正倉院とその宝物の存在、二〇世紀初頭の敦煌文献の発見と三度に渡る大谷探検隊の調査、宗派擁護から一歩離れた歴史学的仏教学の展開、漢語からウイグル語やソグド語のような中央アジア諸言語による研究の深化などを指摘することができる

かもしれない^⑫。白鳥庫吉、桑原隲蔵、羽田亨のような古典的西域研究をへて、岩村忍や間野英二らによる中央アジア研究の興隆、そして移動する民であるソグド人と彼らに関する多言語史料に注目した森安孝夫、荒川正晴、吉田豊、森部豊らは、ヨーロッパでいえば初期中世という時代にあたる東西交渉史について、その時代時代にあつて最先端と言つてよい成果を残している^⑬。もちろん欧米諸語で刊行される研究もあり、時として招待講演や連続講義もあり、またその研究の水準ゆえに欧米の研究者も日本語で書かれた研究に依拠する場合もある^⑭。その結果として、少なくとも欧米の東洋学コミュニティにおいては、中国や韓国のそれと同様に、日本の成果は一部受容されている。しかし中世グローバルヒストリーを唱える研究者の間にその成果が還元されているかといえば、いまだそうだと言いつけるだけの証拠はない。それはハンセン『シルクロード文化史』や、フランコパンによる話題となったベストセラー『シルクロード』の参考文献を見れば一目瞭然である^⑮。

モンゴル研究

他方で中央アジアの遊牧民族研究、中国史の元朝研究、イスラーム史のイルハン朝研究の接点となる一三・一四世紀のモンゴル研究についても振り返っておく必要があるだ

ろう。

多言語研究領域としてのモンゴル帝国史の開祖は本田実信である。⁽²⁶⁾彼ののち誕生した多くの専門家の中でもモンゴル帝国史像を人口に膾炙させたのは杉山正明である。杉山は多数の一般書で世界史上のモンゴル帝国の役割を紹介する一方で、極めて文献学的な成果をも一冊の論集にまとめている。⁽²⁷⁾そのパースペクティヴは日本からヨーロッパ半島に至るまでを包摂しており、文字通りのユーラシア史・世界史・グローバルヒストリーを論じている。欧米のヨーロッパ史家が中世グローバルヒストリーを自覚的に認識したのはおおよそアブールゴドのモンゴル帝国による世界システム論によってであるが、ある意味その著書を上回る理解がすでに日本でなされていたことは特筆して良い。広域政治や統治に強みを発揮した杉山のモンゴル帝国論は、その教え子である宮紀子に継承されている。漢籍の詳細な検討を通じてモンゴル帝国（元朝）における書籍生産を論じた宮は、その後、研究領域を東西に拡大し、今後東西交渉史において常に参照し続けられるであろう『モンゴル時代の「知」の東西』を上梓した。⁽²⁸⁾その一方で欧語での発表を通じて、海外の研究史に乗る流れも見られる。たとえばモンゴル時代の貨幣史でグローバルな図柄を描く黒田明伸、ウイグル語文献の厳密な文献学的考証に基づく中央アジア像

を再現する松井太、モンゴル帝国の交易ネットワークを移動するモノに文献・考古学双方からアプローチする四日市康博らの研究は関連する海外の研究も十分に吸収した上で新しい成果を問うている。⁽²⁹⁾

この分野に関して、中世ヨーロッパとの観点で最も有用なのは、今なお佐口透『モンゴル帝国と西洋』である。⁽³⁰⁾もちろん時代が時代だけに古びたところはあるが、両世界の関係をまとめた文献としては日本語で代わるものがない。先の段で述べたように、日本におけるモンゴル帝国史研究は高水準にあるが、筆者の見限りの、空隙地になっているのは、ヨーロッパとの関係である。マルコ・ポーロのみならずモンゴル・ミッシェンによるラテン語史料が一定分量残っているものの、実はヨーロッパでもモンゴル帝国とヨーロッパの状況双方を抑えての研究は十分とは言えない。これは中世ヨーロッパ史のユーラシア史的位置を理解するためには必須の検討領域であるにもかかわらず、奇妙な空隙となっている。しかし近年、マルコ・ポーロに加えて当該地域に関する諸言語史料の翻訳が進展していることに加え、若手研究者による実証研究も刊行されつつある。⁽³¹⁾

イスラーム・インド洋研究と海域アジア研究

イスラーム・インド洋研究として最も生産的であるのは

家島彦一であろう。モリス・ロンバルと同様に、イスラーム世界の交易ネットワークを再現した『イスラム世界の成立と国際商業』に引き続き、前近代インド洋を対象とした二冊の研究書を刊行した。家島彦一の研究の背景には、今なお世界中に写本が散在する一次史料の徹底的な検討がある。家島が情報の底本としたイブン・バットウータやイブン・ジュバイルらの証言を私たちは詳細な訳注付きで日本語で読むことができる。彼に引き続き、栗山保之、四日市康博、鈴木英明らが、引き続き前近代のインド洋について研究を刊行している。

他方で東アジアから東南アジアにかけての海域アジアの研究においては、桃木至朗編『海域アジア史研究入門』ならびに羽田正・小島毅編『海から見た歴史』が一つの指針となる。いずれも日本語による分厚い蓄積のある分野を総合した試みであり、せいぜい各国単位の対外交渉史であった海域交渉の歴史を、海域アジアという歴史空間概念を設定すること、より広い対象を包摂することに成功した。とりわけ後者は英語版も刊行されており、すでに英語で紹介されている網野善彦のパスペクティヴなどと合わせて、日本から発信した歴史研究として画期的な意味を持ちうる。これらも近世以降に重心が置かれていることには違いないが、大量の銀の生産と流通を経験しながら海禁政策を

とる近世という特殊な時代を浮き彫りにするにあたって、中世以前の位置付けは重要なものとなる。私たちが日本語で馴染むことができる数多くの海域研究の単著・叢書・論文は、実際英語で共有されたとするならば、大きなインパクトを与えることになるだろう。その後、内容をより深化させた共同研究なども刊行されており、今後とも可能性のある分野である。

西洋史の応答

以上述べてきたように、東洋学の伝統のある日本では、母語により、十分な質量を伴う前近代アジアのグローバルヒストリーを手にすることはできる。しかし、本稿の目的である中世ヨーロッパとの関係という点ではどうか。西洋中世史家で、十字軍を超えての東方との繋がりに関心をもつ研究者は必ずしも多くはない。中堅以上の世代で若干の名前を挙げるならば、東方認識を扱った樺山紘一、シチリア島というミクロな空間からグローバルな異文化交流の実態を明らかにした高山博、ロシアと周辺諸地域の関係を論じた松木栄三、ユーラシアの騎馬作法の導入を論じた堀越宏一の論考、ユーラシア史の中にヨーロッパの歴史を位置付けようとした佐藤彰一、イタリア商人の黒海以東との交易に着目した大黒俊二らの成果などである。共同研究の試

みという点では、筆者が編者をつとめた『北西ユーラシアの歴史空間』を挙げることもできるだろう。⁽⁸⁾ いずれにせよ、西洋史側から十分に中世グローバルヒストリーに対応する体制ができていくわけではない、というのが現状のように思われる。もちろん近年では、ラテン語やギリシア語以外にもイスラーム圏や中央アジアの諸言語を身につけた若手が現れてきており、現状を変えてゆくことが期待される。

五 展望

筆者の関心に従って、『ヨーロッパ覇権以前』をさしあたりの基準にしながら、いくつかの国における中世グローバルヒストリーの道筋を整理してきた。もちろん、筆者の見落としなどいくらでもあるはずだし、同じ研究を取り上げたとしても、筆者とは異なる整理の仕方もあるだろう。本稿それ自体が必ずしも普遍性のある内容ではなく、主として日本のアカデミアの中で教育と研究を重ねてきた一研究者が置かれたヒストリオグラフィーの蓄積の産物であることは認めねばならない。

その上で最後に、筆者なりにまとめた中世グローバルヒストリーの現状を鑑みて、今後筆者の立場で今後どのような方向がありうるのか展望を記しておきたい。

中世グローバルヒストリーのかたち

最初に述べたように、グローバルヒストリーは、本来、近代史の産物である。他方で帝国による広域支配、モノや人や言語の国際性、地域間のネットワーク化が世界各地で進展していた古代は、あえてその名前を冠するまでもなく、グローバルヒストリーの要素が内包される時代でもある。そうであるならば、古代と近代という二つの時代に挟まれた中世におけるグローバルヒストリーとは何か、というのが本稿でのリサーチクエストでもあった。

実のところ、近代国家の枠組みを有形無形に内包し、他方で古代国家の諸要素をなおも継承している「中世」という時代に、人間の行動範囲や数値スケールの異なる他の時代で鍛えられたグローバルヒストリー概念を適用することは、思っているほど簡単でもない。キャサリン・ホームズらが唱えるように、古代とも近代とも異なるあり方を示すネットワークのあり方に注目することにより、大小さまざまなレベルで「グローバルな中世」を目指すことも可能であろうし、ミヒヤエル・ボルゴルテが示すように、中世に最も極端な形を示した複数の一神教と社会の関わりを比較史的に追求することで、中世の特徴を抽出することができるかもしれない。ヨハネス・プライザー¹¹カペラーやア

アメリカの中世学者らが追求しているように、地球規模の気候変動を地域ごとに微細に見てゆくことで、自然環境というより大きなフェーズから共時性と地域特性を見てゆくやり方もあるだろう。また近年中世を対象とした大型科研である「中近世キリスト教世界の多元性とグローバル・ヒストリーへの視角」（課題番号 25241035・代表・甚野尚志）や「前近代ユーラシア西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開」（課題番号 16H01953・代表・鶴島博和）のように、キリスト教や貨幣というフォーカルポイントを設定して、ヨーロッパの諸要素が外部世界とどのように接続しているのかを確かめる道もあるだろう。

いずれにせよ、目的論的にその価値観や役割を絶対視しがちなキリスト教や諸国家制度の生成するヨーロッパ半島を世界の諸地域の中に置き直すことで、まずは相対化するという点では、従来の中世ヨーロッパ史研究とは異なる態度が、中世グローバルヒストリーを標榜する各研究には見られる。

ヒストリオグラフィ

他方で、それぞれの研究に背後にはるヒストリオグラフィについてもおかねばならない。今回、英語圏、ドイツ語圏、フランス、日本それぞれの中世グローバル

ヒストリーを振り返ってみた。もちろん、研究史を共有すべきアカデミアは世界に一つしかないはずであり、英語によるアカデミアの席卷が進んでくるとはいえ、現状としてナショナルな、もしくは言語の枠に従ったヒストリオグラフィの中で個別研究が生成されているという現実は厳然としてある。これは、アカデミアの一体性という観点からはある種の不幸であるとともに、研究の多様性を生んでいることも確かである。そうした現状の良し悪しは別として、私たちは各国ごとのヒストリオグラフィにより敏感にならねばならない。

その上で言語障壁について考えてみたい。例えば日本語を母語とする日本中世史家とドイツ語を母語とするドイツ中世史家が、それぞれに補い合う要素があるとして、突然の対話は可能であろうか。もちろん、優秀な通訳を挟めば、可能であるかもしれない。しかし、各国ごとのヒストリオグラフィが蓄積してきた研究史、歴史用語、歴史概念はそれなりの固有性を持っており、単純に通訳をしただけでは理解困難な場合も多い。例えば鶴島博和らが試みた日英中世史料の比較にはその困難さを垣間見ることができ⁸⁹る。その際に、有用な媒介者となるのは、ドイツにおける日本学の専門家であり、日本におけるドイツ中世史の専門家である。彼らは研究対象国の状況も一定程度以上理解してお

り、それぞれにとっての最も適切な訳語を提示できる可能性も高い。

境域・海域・「中世のゾミア」?

さて、以上のような状況を受けて、日本人である私たちは何をなすべきであろうか。もちろん学問は個人の自由意志と自由選択に基づく作業であり、その結果の集合が各国のヒストリオグラフィーを構築するので、筆者が日本人を代表して何かを言うことはできないし言うつもりもない。ただ、現状を顧みつつ、現在自分が置かれている状況と研究を中世グローバルヒストリーを実践する一つの事例として提示しておきたい。

現在筆者はオックスフォード大学のイアン・フォレスト博士らとともに、中世グローバルヒストリーの実践企画として、スコットのゾミア論に着想を得た「中世のゾミア」と言う共同研究を進めている。詳細については前号に記したので繰り返さないが、ヨーロッパ半島に限らず中世と言われる時代には世界の各地に存在したのである、国家権力の及ばない境域空間における人間活動のあり方を再考する試みである。この企画を進めるにあたって、私は、十分に日本独自の貢献を成すことが可能であることを実感した。本稿で述べた日本の中世グローバルヒストリーの試みに照

らすならば、島嶼日本 (Japanese archipelago) という海域と不可分の環境を意識しながら歴史学の成果を蓄積してきた日本が、先方では圧倒的に情報が不足しているアジア史や海域史の事例と論じ方を提供できるように思えたからである。幸運なことに二〇一九年度から筆者を代表とした「前近代海域ヨーロッパ史の構築：河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」(課題番号 19H100516) という五年計画の科研が採択された。前近代ヨーロッパ半島の歴史を海域・河川・湖沼などとの関わりから見直すという研究であり、ヨーロッパ単体だけをとってみれば現地に類似の問題意識でアプローチした研究がないわけでは無い^⑤。しかし科研では、ロシア・中央アジア・海域アジア・東アジアなどの専門家の協力も得ていることもあり、研究計画の一部としてオックスフォード側が提案した「中世のゾミア」に十分に貢献できるように思われる。もちろん言語障壁も含めて課題も多いが、一方的に先方から吸収するだけの関係でも大風呂敷のアイディアだけの交換でもなく、確実な史料証言に基づきながらモノグラフとして共同研究を進めることの実感はある。

以上は筆者をはじめとする一部の研究者によるささやかな試みにすぎないし、成功するかどうかも現時点では保証できない。しかし自らの置かれたヒストリオグラフィーと

中世グローバルヒストリーの潮流（小澤）

専門領域のローカル性を認識し、読者人口の多い言語で共通テーマに関する共同作業を進めるという作業は、我々以外にも様々な分野で行われているだろう。その蓄積の結果として、共同研究の成果と日本なりの中世グローバルヒストリーが刊行される日を待ちたい。

註

- (1) 水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、二〇一〇年。パシラ・カイル・クロスリー『グローバルヒストリーとは何か』佐藤彰一訳、岩波書店、二〇一二年。羽田正『グローバル化と世界史』東京大学出版会、二〇一八年。
- (2) リチャード・ドライトンらが示すように、ランケ時代の「普遍史」(Universal History) から、一九七〇年代のアメリカで興隆したマクニールやホジンソンの「世界史」(World History) を経て、イギリス帝国主義研究のオブライエン周辺に熱源を求めることができる「グローバルヒストリー」(Global History) という単線的な道筋を想定するところも可能である。この分野の主導的な雑誌である *Journal of Global History* は *Journal of American Studies* とともに、イギリス帝国史研究者を中心に、二〇〇六年に立ち上げられた。Richard Drayton and David Motadel, "Discussion: the futures of global history", *Journal of Global History*, 13 (2018), pp. 1-21.
- (3) 秋田茂「グローバルヒストリーの挑戦と西洋史研究」『パブリックヒストリー』五、二〇〇八年、三四-四二頁。
- (4) 「特集：『世界史』をいかに語るか グローバル時代の歴史学」『思想』一一二七、二〇一八年。
- (5) 羽田正編『グローバルヒストリーと東アジア史』東京大学出版会、二〇一六年。秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、二〇一三年。
- (6) ジャネット・アプルーレルゴド、『ヨーロッパ覇権以前 もうひとつの世界システム』佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳、二冊、岩波書店、二〇〇一年 [Janet Abu-lughod, *Before European Hegemony. The World System, AD 1250-1350*, Oxford, Oxford UP, 1989]。
- (7) William R. Day, Jr., *An Analysis of Janet L. Abu-lughod's Before European Hegemony*, London, Routledge, 2017.
- (8) 戦後アメリカにおける比較封建制研究への関心は、Rushon Coulborn (ed.), *Feudalism in History*, New Jersey, Princeton UP, 1956を参照。中世史と朝河に関心は、海老澤衷・近藤成一・甚野尚志編『朝河貫一と日欧中世史研究』吉川弘文館、二〇一七年。
- (9) Gabriel Spiegel, and Paul Freedman, "Medievalisms old and new: The rediscovery of alterity in North American Medieval Studies," *American Historical Review*, 103 (1998), pp. 677-704.
- (10) ありわけアメリカを中心とした近年の中世科学史研究の集大成として、David C. Lindberg and Michael H. Shank (eds.), *The Cambridge History of Science, vol.2: Medieval Science*, Cambridge, Cambridge UP, 2013を参照。
- (11) Kenneth Setton, *The Papacy and the Levant, 1204-1571*, 4 vols., Philadelphia, American Philosophical Society, 1974-86.
- (12) Marshall G.S. Hodgson, *The Venture of Islam: Conscience and History in A World Civilization*, 3 vols., Chicago, University of Chicago Press, 1974-77; Marshall G.S. Hodgson, *Rethinking World History: Essays on Europe, Islam, and World History*, ed. with an introduction and conclusion by Edmund Burke, III,

- Cambridge, Cambridge UP, 1993.
- (13) 筆頭に挙げられる『キネハム』は移民者であるコイネインの大部のユダヤコロニーに関する研究である。S. D. Goitein, *A Mediterranean Society: The Jewish Communities of the Arab World as Portrayed in the Documents of the Cairo Geniza*, 6 vols., Berkeley, University of California Press, 1967-1993.
- (14) それぞれの業績は多数にのぼるが、次の通史が、この分野におけるアメリカにおける研究者の厚みを示しているように思われる。Denis Sinor (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge, Cambridge UP, 1990; Nicola di Cosmo, Allen J. Frank, and Peter B. Golden (eds.), *The Cambridge History of Inner Asia: The Chinggisid Age*, Cambridge, Cambridge UP, 2009. 次の論集が、執筆者は世界各国から招聘されたユダヤ系と『アメリカな』以外の試みである。Nicola di Cosmo and Michael Maas (eds.), *Empires and Exchanges in Eurasian Late Antiquity. Rome, China, Iran, and the Steppe, ca. 250-750*, Cambridge, Cambridge UP, 2018.
- (15) Victor Lieberman, *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800-1830*, 2 vols., Cambridge, Cambridge UP, 2003-2009.
- (16) Michael McCormick, *Origins of the European Economy. Communications and Commerce AD300-900*, Cambridge, Cambridge UP, 2001.
- (17) Richard Hodges, and David Whitehouse, *Mohammed, Charlemagne, and the Origins of Europe. Archaeology and the Pirene Thesis*, London, Duckworth, 1983; Richard Hodges, *Dark Age Economics: The Origins of Towns and Trade A.D. 600-1000*, 2nd. ed., London, Duckworth, 1989; Klavs Randsborg, *The First Millennium A.D. in Europe and the Mediterranean: An Archaeological Essay*, Cambridge, Cambridge UP, 1991.
- (18) 『ローレリク』は『ユンヌ』の古典的作品である『中世都市』に添えた序文で、本書が中世グローバルヒストリーの重要要素である交易拠点としての都市研究に与えた重要性を強調している。Michael McCormick, "Introduction: Henri Pirenne and the deep history of globalization," in Henri Pirenne, *Medieval Cities*, New Jersey, Princeton UP, 2014, ix-xxxi. 『Early Medieval Europe』は "Origins of the European Economy", *Early Medieval Europe*, 12 (2004), pp. 259-323 による特集を組んでいる。
- (19) Michael McCormick, Paul Dutton, Paul Mayewski, and Nick Patterson, "Volcanoes and the climate forcing of Carolingian Europe, A.D. 750-950", *Speculum*, 82 (2007), pp. 865-895; Michael McCormick, "Molecular middle ages: early medieval economic history in the 21st century," in *The Long Morning of Medieval Europe: New Directions in Early Medieval Studies*, ed. Jennifer Davis and Michael McCormick, Aldershot, 2008, pp. 83-97; Michael McCormick, "Climates of history, histories of climate: From history to archaeoscience," *Journal of Interdisciplinary History*, 50 (2019), pp. 3-30.
- (20) Patrick Geary and Krishna Veeramah, "Mapping

European population movement through genomic research”, *Medieval Worlds*, 4 (2016), pp. 65-78.

- (21) Kyle Harper, *The Fate of Rome. Climate, Disease, and the End of an Empire*, New Jersey, Princeton UP, 2017.
本書は邦訳予定のようだ。¹⁹⁾

- (22) John Haldon et al., “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (1): Climate”, *History Compass*, 16, (2018):e12508; John Haldon et al., “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (2): Plagues and a crisis of empire”, *History Compass*, 16 (2018): e12506; John Haldon et al., “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (3): Disease, agency, and collapse”, *History Compass*, 16 (2018):e12507. 以上に対する著者の応答がある。²⁰⁾ Kyle Harper, “Integrating the natural sciences and Roman history: Challenges and prospects”, *History Compass*, 16 (2018):e12520.

- (23) サイネはイト (<https://climatechangeandhistory.princeton.edu/>)。

- (24) キャサリン・ホームズ「グローバルな中世 問題とテーマ」『史苑』八〇—一〇二〇年、一—三五頁。

- (25) Catherine Holmes and Naomi Standen, ed. *The Global Middle Ages*, Oxford, Clarendon Press, 2018.

- (26) この間の事情は「小澤実「グローバルな中世」から「中世のソニア」へ：オックスフォードの中世グローバルヒス

トリー」『史苑』八〇—一〇二〇年、九五—一〇九頁。

- (27) Judith Jesch, *The Viking Diaspora*, London, Routledge, 2015; Leslie Abrams, “Connections and exchange in the Viking World”, in *Byzantium and the Viking World*, ed. Fedor Androshechuk, Jonathan Shepard, and Monica White, Stockholm, 2016, pp. 27-52; B. Star, James H. Barrett, A. T. Gondak, and S. Boessenkool, “Ancient DNA reveals the chronology of walrus ivory trade from Norse Greenland”, *Proceedings of the Royal Society B* 285, 2018; James H. Barrett (ed), *Contact, Continuity and Collapse: The Norse Colonization of the North Atlantic*, Turnhout, Brepols, 2003.

- (28) Dimitri Obolensky, *The Byzantine Commonwealth: Eastern Europe, 500-1453*, New York, Praeger Publishers, 1971; Jonathan Shepard (ed.), *The Cambridge history of the Byzantine Empire c. 500-1492*, Cambridge, Cambridge UP, 2008; Jonathan Harris, Catherine Holmes, and Eugenia Russell (eds.), *Byzantines, Latins, and Turks in the Eastern Mediterranean World after 1150*, Oxford, Oxford UP, 2012.

- (29) Jonathan Riley-Smith (ed.), *The Oxford history of the Crusades*, Oxford, Oxford UP, 1999; Eric Christiansen, *The Northern Crusades*, 2nd ed., London, Penguin, 1997; Norman Housley, *The Later Crusades, 1274-1580: From Lyons to Alcazar*, Oxford, Oxford UP, 1992; Carole Hillenbrand, *The Crusades: Islamic*

- Perspectives*, Edinburgh, Edinburgh UP, 1999. Jonathan Harris, *Byzantium and the Crusades*, 2nd ed., London, Bloomsbury Academic, 2014.
- (30) Marcus Bull and Norman Housley (eds.), *The Experience of Crusading, 1: Western Approaches*, Cambridge, Cambridge UP, 2003; Peter Edbury and Jonathan Phillips (eds.), *The Experience of Crusading, 2: Defining the Crusader Kingdom*, Cambridge, Cambridge UP, 2003; Jonathan Harris (ed.), *New Oxford Illustrated History of the Crusades*, Oxford, Oxford UP, in preparation; Martin Bull, and Thomas Madden, (eds.), *The Cambridge History of the Crusades*, 2 vols., Cambridge, Cambridge UP, in preparation.
- (31) Peter Jackson, *The Mongols and the West, 1221-1410*, Harlow, Pearson, 2015.
- (32) Chris Wickham, *Medieval Europe*, New Haven, Yale UP, 2016; Peter Frankopan, *The Silk Roads: A New History of the World*, London, Bloomsbury, 2015; David Abulafia, *The Great Sea: A Human History of the Mediterranean*, Oxford, Oxford UP, 2011.
- (33) リチャード・サザーン『中世の形成』森岡敬一郎・池上忠弘訳、みすず書房、一九七八年 [Richard W. Southern, *The Making of the Middle Ages*, London, Hutchinson, 1953]; ロン・ト・ノート・ノート・ノート『ヨーロッパの形成 九五〇年―一三五〇年における征服・植民・文化変容』伊藤誓・磯山甚一訳、法政大学出版局、二〇〇三年 [Robert Bartlett, *The Making of Europe. Conquest, Colonization and Cultural Change 950-1350*, London, Penguin Books, 1993].
- (34) Merry E. Wiesner-Hanks, *A Concise History of World, Cambridge*, Cambridge UP, 2015.
- (35) 上の組織の歴史に関する「樺山紘一『歴史家たちのヨーロッパ』国際歴史学会議の百年』刀水書房、二〇〇七年を参照。
- (36) なお上の文献に対しては、ドイツで直ちに紹介が出た。Michael Borgolte, Raimund Schulz und Benedikt Stuchtey, “Die neue “Cambridge World History”, *Historische Zeitschrift*, 304 (2017), S. 123-146.
- (37) 例えばヨーロッパ・ルビエストリーと銘打った六巻本の通史のうち第三巻は中世に新しうなれよう。Johannes Fried und Ernst-Dieter Hehl (Hrsg.), *Weltdeutungen und Weltreligionen: 600 bis 1500* (WBG Welt-Geschichte: Eine globale Geschichte von den Anfängen bis ins 21. Jahrhundert, 3), Berlin, WBG, 2010.
- (38) ドイツにおける（近代）グローバルヒストリーの流れは、‘アン・ド・ナス・エックカート’ドイツにおけるグローバル・ヒストリー」羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社、二〇一七年、三五―五九頁。ドイツ語圏向けに書かれた教科書は、Sebastian Conrad, *Globalgeschichte: Eine Einführung*, München, C. H. Beck, 2013。
- (39) とりわけアルトホーフら新しい研究については、西川洋一「『スフォータイプ・ター』の中の中世国制史』『国史学会雑誌』一三二―一三三、二〇一八年、一―五六頁。

一九八〇年代以降のドイツにおける社会史研究の成果を最もよく反映してゐるのは、甚野尚志『中世ヨーロッパの社会観』講談社学術文庫、二〇〇七年。

- (40) Michael Borgolte, *Sozialgeschichte des Mittelalters. Ein Forschungsbilanz nach der deutschen Einheit* (Historische Zeitschrift Beihefte, NF., 22), München, Oldenbourg, 1996.
- (41) 以下のサイトを参照(<https://www.geschichte.hu-berlin.de/de/bereiche-und-lehrstuehle/emeriti-ehemalige-professor-immen/migelforschung/forschung>)。
- (42) Michael Borgolte, Julia Dücker, Marcel Müllerburg, und Bernd Schneidmüller, *Integration und Desintegration der Kulturen in europäischen Mittelalter*, Berlin, Walter de Gruyter, 2011.
- (43) Michael Borgolte, *Christen, Juden, Muselmanen : die Erben der Antike und der Aufstieg des Abendlandes 300 bis 1400 n. Chr.* v. München, Siedler, 2006; Michael Borgolte (Hrsg.), *Migrationen im Mittelalter. Ein Handbuch*, Berlin, Walter de Gruyter, 2014.
- (44) 成果として Michael Borgolte (Hrsg.), *Enzyklopädie des Stiftungswesens in mittelalterlichen Gesellschaften*, 3 vols., Berlin, Walter de Gruyter, 2014-18; Michael Borgolte, *World History as the History of Foundations 3000 BCE to 1500 CE*, Leiden, Brill, 2020.
- (45) ホルホルツのグローム・ニコストリーに關する論集は以下の論集に *ホルホルツのグローム・ニコストリーに關する論集* として in der größeren Welt : Essays zur Geschichtsschreibung

und Beiträge zur Forschung, hrsg. von Tillmann Lohse und Benjamin Scheller, Berlin, Walter de Gruyter, 2014.

(46) Thomas Ertl, *Seide, Pfeffer und Kanonen : Globalisierung im Mittelalter*, Darmstadt, Primus, 2008.

(47) Misha Meier, *Geschichte der Völkerveränderung : Europa, Asien und Afrika vom 3. bis zum 8. Jahrhundert n. Chr.*, München, C.H.Beck, 2019.

- (48) Wolfram Drews, *Die Karolinger und die Abbassiden von Bagdad : Legitimationsstrategien frühmittelalterlicher Herrscherdynastien in transkulturellen Vergleich*, Berlin, Akademie Verlag, 2009; Karsten Jahnke, *Das Silber des Meeres. Fang und Vertrieb von Ostseehering zwischen Norwegen und Italien vom 12. bis zum 16. Jahrhundert*, Köln-Weimar-Wien, UTB Verlag, 2000; Ingrid Baumgartner, "Weltbild und Empire. Die Erweiterung des kartographischen Weltbilds durch die Asienreisen des späten Mittelalters", *Journal of Medieval History*, 23 (1997), pp. 227-253; Felicitas Schmieder, *Europa und die Fremden. Die Mongolen im Urteil des Abendlandes vom 13.-15. Jahrhundert*, Sigmaringen, Jan Thorbeck, 1994.
- (49) Ernst Zehetbauer, *Geschichtsforschung und Archiwissenschaft. Das Institut für Österreichische Geschichtsforschung und die wissenschaftliche Ausbildung der Archivar in Österreich*, Hamburg, 2014.
- (50) Ian Wood, *The Modern Origins of the Early Middle Ages*, Oxford, Oxford UP, 2013, pp. 313-315.

中世グローバルヒストリーの潮流（小澤）

- (51) 当該時代に関して、当初、古代の継続であることを強調する「古代末期」(late antiquity) という言い方で指示していたことが多かったが、中世に向けての移行期であることに重点を置く「ポスト・ローマ」(Post-Rome) という言い方が増加した。
- (52) サイトは (<https://medieval.vlg.oeaw.ac.at/index.php/medievalworlds/>)。
- (53) 小澤美・諫早庸一「ウイーン発の中世グローバルヒストリー：ヨハネス・プラインザーカペラー博士連続講演会」『史苑』八〇・二二・二〇二〇年、一一四―一三四頁。
- (54) Angela Schottenhammer und Peter Feldbauer (Hrsg.), *Die Welt 1000-1250* (Global Geschichte: Die Welt 1000-2000, vol.1), Wien, Mandelbaum, 2011; Thomas Ertl und Michael Limberger (Hrsg.), *Die Welt 1250-1500*(Global Geschichte: Die Welt 1000-2000, vol.2), Wien, Mandelbaum, 2011.
- (55) 例えは、Angela Schottenhammer (ed.), *The East Asian <Mediterranean>: Maritime Crossroads of Culture, Commerce and Human Migration*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2008. 本タタの主著として、Roderich Ptak, *Die Maritime Seidenstrasse. Kristentum, Seefahrt und Handel in vorkolonialer Zeit*, München, C. H. Beck, 2007.
- (56) アレクサンドロ・スタンシニアニ「フランスにおけるグローバル・ヒストリー 過去と現在」羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社、二〇一七年、六〇―七九頁。
- (57) ブラーシユ『人文地理学原理』飯塚浩二訳、二冊、岩波文庫、一九七〇年；フェーブル『大地と人類の進化 歴史への地理学的序論』飯塚浩二・田辺裕訳、二冊、岩波文庫、一九七二―七三年。
- (58) 最も顕著な例の一つは、イタリア中部のラティウム地方の歴史構造の形成を対象とした以下の国家博士論文である。Pierre Toubert, *Les structures du Latium médiéval. Le Latium méridional et la Sabine du IXe siècle à la fin du XIIe siècle*, 2 vols, Rome, École française de Rome, 1973.
- (59) Charles Higounet, *Les Allemands en Europe centrale et orientale au Moyen Age*, Paris, Aubier, 1989. 「宮島直機訳『ドイツ植民と東欧世界の形成』彩流社、一九九七年」; Michel Mollat du Jourdin, *L'Europe et la mer*, Paris, Seuil, 1993. 「深沢克己訳『ヨーロッパと海』平凡社、一九九六年」; Michel Mollat, *Le commerce maritime Normand à la fin du Moyen Age : étude d'histoire économique et sociale*, Paris, Plon, 1952; Robert Delort et François Walter, *Histoire de l'environnement européen*, Paris, PUF, 2001. 「桃木暁子・門脇仁訳『環境の歴史』ヨーロッパ、原初から現代まで』みすず書房、二〇〇七年」; Robert Delort, *Les animaux ont une histoire*, Paris, Seuil, 1984. 「桃木暁子訳『動物の歴史』みすず書房、一九九八年」; Robert Delort, *Le commerce des fourrures en Occident à la fin du Moyen Age (vers 1300-vers 1450)*, 2 vols., Rome, École française de Rome, 1978.
- (60) Paul Pelliot, *Les Mongols et la papauté*, Paris, Picard, 1923; George Coedès (ed.), *Texts of Greek and Latin authors on the Far East : from the 4th c. B.C.E. to the*

14th c. C.E., revised and translated by John Sheldon with contributions by Samuel N.C. Lieu and Gregory Fox. Turnhout, Brepols, 2010.

- (16) 単著『Maurice Lombard, *L'Islam dans sa première grandeur: VIII-XI siècle*, Paris, Flammarion, 1971. 論集』Maurice Lombard, *Espaces et réseaux du haut moyen âge*, Paris, Mouton, 1972; Id., *Monnaie et histoire d'Alexandre à Mahomet* (Études d'économie médiévale, 1), Paris, Mouton, 1971; Id., *Les métaux dans l'ancien monde du V^e au XI^e siècle* (Études d'économie médiévale, 2), Paris, Mouton, 1974; Id., *Les textiles dans le monde musulman du VII^e au XI^e siècle* (Études d'économie médiévale, 3), Paris, Mouton, 1978. とりわけ一九七二年と七四年の論集は「ヨーロッパとの関わりが深い。日本語で読める唯一のロンバルドの著作は「マホメットとシヤルルマーニョ 経済的問題」H・ブレンヌ他「古代から中世へ」ブレンヌ学説とその検討』佐々木克巳編訳、創文社、一九七五年、一〇一―一三三頁。
- (17) Philippe Beaujard, *Les mondes de l'océan Indien*, 2 vols., Paris, A. Colin, 2012.

(18) 次の二本の論文が重要である。Philippe Beaujard, "The Indian Ocean in Eurasian and African world-systems before the sixteenth century", *Journal of World History*, 16 (2005), pp. 411-465; Id., "Three possible Iron-Age world-systems to a single Afro-Eurasian world-system", *Journal of World History*, 21 (2010), pp. 1-43. なまじり、ボジヤールの説を紹介しながら前近代ユーラシアの歴史を描

史苑 (第八〇巻第二号)

こうとしたのは、佐藤彰一「西暦一千年紀のヨーロッパ・インド洋貿易」『ヨーロッパ・海域』そしてユーラシア：近代以前の世界』立教大学アジア地域研究所、二〇一五年、六―三六頁。ボジヤールの主著の英訳は『*The Worlds of the Indian Ocean. A Global History*, 2 vols., Cambridge, Cambridge UP, 2019である。』は、は著者自身による修正や増補もある筈。今後英語版が正本となる。

- (19) François-Xavier Fauvelle-Aymar, *Le rhinocéros d'or: histoires du Moyen Âge africain*, Paris, Alma, 2013. 46の専門書には François-Xavier Fauvelle (ed.), *L'Afrique ancienne : de l'Accus au Zimbabwe : 20000 avant notre ère-XVII^e siècle*, Paris, Belin, 2018を参照。
- (20) なおフオヴェルが扱うテーマの一部については、日本語でも注目する研究を読むことが出来る。刈谷康太「二四世紀のスーダン西部の金産地を巡る情報操作：マンサー・ムーサーの語りの分析を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』八六、二〇一三年、五五―八〇頁。一般的には、私市正年『サハラが結ぶ南北交流』山川出版社、一九九四年。
- (21) Patrick Boucheron (ed.), *Histoire mondiale de la France*, Paris, Seuil, 2017. なお本書とは別個に「グローバル性を意識したフランス史の通史が日本で刊行されたことは共時的現象として興味深い。平野千果子編『新しく学ぶフランス史』ワネルヴア書房、二〇一九年。
- (22) Patrick Boucheron (ed.), *France in the World. A New Global History*, New York, Other Press, 2019.
- (23) Patrick Boucheron (ed.), *Histoire du monde au XV^e siècle*, 2 vols., Paris, Fayard, 2009.

- (69) たとえば、Pierre Chaunu, *L'expansion européenne du XIII^e au XV^e siècle*, 3. ed., Paris, PUF, 1995 (1969)。
- (70) この辺りの事情は、小澤実「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ・オックスフォードの中世グローバルヒストリー』『史苑』八〇―一、二〇二〇年、九五―一〇九頁を参照。
- (71) 日本におけるヒストリオグラフィの独自性については以下も参照。羽田正「日本におけるグローバル・ヒストリーと世界史」羽田編『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社、二〇一七年、八〇―一〇四頁。
- (72) 日本における東洋学の研究史については膨大な文献があるが、近年の研究動向をまとめたものとして、山口弘江「日本における西域研究 仏教に関連する近年の動向を中心として」『駒澤大學佛教學部論集』四六、二〇一五年、四七―六五頁。
- (73) 白鳥庫吉『西域研究』上下、岩波書店、一九八一年・桑原隲藏著・宮崎市定解説『蒲寿庚の事蹟』平凡社、一九八九年・羽田亨『西域文明史概論・西域文化史』平凡社、一九九二年・岩村忍『十三世紀東西交渉史序説』三省堂、一九三七年・間野英二『中央アジアの歴史』講談社現代新書、一九七九年・森安孝夫『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会、二〇一五年・荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会、二〇一〇年・曾布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』臨川書店、二〇一一年・森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部、二〇一〇年。
- (74) 欧米諸語による研究成果として、例えば Takao Moriyasu, *Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road*, Turnhout, Brepols, 2019。
- (75) ヴァレリー・ハンセン『図説シルクロード文化史』田口未和訳、原書房、二〇一六年〔*The Silk Road. A New History*, Oxford, Oxford UP, 2012〕。ハンセンが本書であげている日本人の文献は池田温と森安孝夫のもののみである。
- (76) 本田実信『モンゴル時代史研究』東京大学出版会、一九九一年。
- (77) 杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、二〇〇四年。ロシアやヨーロッパとの関係は『モンゴル帝国と長いその後』講談社、二〇〇八年に述べられている。
- (78) 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』二巻、名古屋大学出版会、二〇一八年・同『モンゴル帝国が生んだ世界地図』日本経済新聞出版社、二〇〇七年・同『モンゴル時代の出版文化』名古屋大学出版会、二〇〇六年。なお前著については、『史苑』七九―二の諫早庸一による書評と八〇―一の宮による応答も参照。
- (79) Akinobu Kuroda, "The Eurasian silver century, 1276-1359: Commensurability and multiplicity", *Journal of Global History*, 4 (2009), pp. 245-269; Yasuhiko Yokkaichi, "The Maritime and Continental Networks of Kish Merchants under Mongol Rule: The Role of the Indian Ocean, Fars and Iraq", *Journal of Economic and Social History of the Orient*, 62 (2018), pp. 428-463.
- (80) 佐口透編『モンゴル帝国と西洋』平凡社、一九七〇年。

なお当該分野に関しては海老澤哲雄による多数の論文があるが、残念ながら一書としてまとまっていない。大まかな見取り図は、海老澤哲雄「西欧とモンゴル帝国」『世界史への問い一〇 移動と交流』岩波書店、一九九〇年、三一七―三四二頁。

- (81) 高田英樹編訳『原典中世ヨーロッパ』東方記、名古屋大学出版会、二〇一九年。劳作だが、本号に掲載されている村田光司による書評を参照。Mamoru Fujisaki, "Diplomatic Communication between the Popes and the Khans until 1270s", *Journal of Western Medieval History*, 44 (2019), pp. 69-99; Koji Murata, "The Mongol's Approach to Anatolia and the Last Campaign of Emperor John III Vatatzes", *Greek, Roman, and Byzantine Studies*, 55 (2015), pp. 470-488.

(82) 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業 国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店、一九九一年。同『海が創る文明 インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社、一九九三年。同『海域から見た歴史 インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会、二〇〇六年。

- (83) 栗山保之『海と共にある歴史 イエメン海上交通史の研究』中央大学出版部、二〇一二年；Yasuhiko Yokkaichi, "Chinese and Muslim Diasporas and the Indian Ocean Trade Network under Mongol Hegemony", in *The East Asian Mediterranean: Maritime Crossroads of Culture, Commerce, and Human Migration*, ed. Angela Schottenhammer, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 2008, pp. 73-101; 鈴木英明「驚異としてのアフリカ大陸 中世ア

ラビア語地理文献に見えるザンジュ地方」、山中由里子編『驚異の文化史』名古屋大学出版会、二〇一七年、二九〇―三〇五頁。

- (84) 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、二〇〇八年；羽田正・小島毅編『東アジア海域に漕ぎ出す―海から見た歴史』東京大学出版会、二〇一三年。

- (85) Masashi Haneda and Mihiko Oka (eds.), *A Maritime History of East Asia*, Kyoto, Kyoto University Press, 2019; Yoshiko Amino, *Rethinking Japanese History*, translated and with an introduction by Alan S. Christy; preface and afterword by Hitomi Tomomura, Ann Arbor, Center for Japanese Studies, the University of Michigan, 2012 [網野善彦『日本の歴史をよみなおす(全)』ちくま学芸文庫、二〇〇五年]。

(86) 鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史 ネットワークと海域』明石書店、二〇一九年。

- (87) 樺山紘一『異境の発見』東京大学出版会、一九九五年；松木栄三『ロシアと黒海地中海世界』風行社、二〇一八年；高山博『神秘の中世王国 ヨーロッパ・ビザンツ・イスラム文化の十字路』東京大学出版会、一九九五年；堀越宏一「中世ヨーロッパにおける騎士と弓矢」小島道裕編『武士と騎士 日欧比較中近世史の研究』思文閣出版、二〇一〇年、五五―八八頁；佐藤彰一『中世世界とはなにか』岩波書店、二〇〇八年；佐藤彰一編「特集：グローバル・コンテクストの中のポスト・ローマ期」『西洋中世研究』五(二〇一四年) 一―一三頁；Shoichi Sato, "Sindbad au Japon? Les échanges maritimes entre le Proche-Orient et l'Extrême-

- Orient d'après le trésor du SHOSO-IN", in *L'Islam au Carrefour des Civilisations Médiévales*, ed. Michel Sot et Dominique Barthelemy, Paris, PUF, 2012, pp. 81-90.
- (88) 小澤実・長縄宣博編『北西ヨーロッパの歴史空間 前近代ロシアと周辺地域』北海道大学出版会、二〇一六年・小澤実「学界展望 モンゴル帝国期以降のヨーロッパとヨーロッパ世界との交渉」『東洋史研究』七一、二〇一二年、四三八―四三三頁。
- (89) 鶴島博和・春田直紀編『日英中世史料論』日本経済評論社、二〇〇八年。
- (90) Michael North, "Connected seas I", *History Compass*, 16 (2018): e12503; Id. "Connected seas II: The perception of the memory of the seas", *History Compass*, 16 (2018): e12502; Michel Balard (ed.), *The Sea in History, The Medieval World*, London, Blackwell, 2017; Michael Borgolte und Nicholas Jaspert (Hrsg.), *Maritimes Mittelalter. Meer als Kommunikationsräume*, Ostfildern, Jan Thorbeck, 2016.

（本学文学部教授）